

[普及事項]

新技術名：ネギ葉枯病に対する防除技術（平成 26～28 年）

研究機関名 農業試験場 生産環境部 病害虫担当
担当者 齋藤隆明・藤井直哉

[要約]

秋冬ネギにおいて、ネギ葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）による被害を抑えるためには、9月上旬から10月上旬まで約10日間隔でアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤を組み合わせる防除を行うことが重要である。

[普及対象範囲]

県内全域

[ねらい]

秋田県における秋冬ネギにおいて、ネギ葉枯病（以下、葉枯病）菌が原因となって形成される黄色斑紋症状によって市場からのクレームが多くなっている。

そこで、葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）の発生を抑える防除体系について検討し、防除対策の資料とする。

[技術の内容・特徴]

- 1 葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）に対して防除効果が高い薬剤は、アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤である（図1）。
- 2 葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）に対して9月上旬から10月上旬まで約10日間隔で4回薬剤散布を行う防除体系では、9月上旬・中旬、10月上旬の3回散布と慣行の2回散布より効果が高く、対照の6回散布と同等の防除効果が認められ、可販率80%を確保できる（表1、図2、3）。
- 3 以上のことから、葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）に対して効果の高い防除体系は、アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤を組み合わせる9月上旬から10月上旬まで約10日間隔で4回薬剤散布を行う体系である。

[成果の活用上の留意点]

- 1 農業試験場内ほ場では葉枯病に対する感受性の高い品種「MSI—953」、能代市現地ほ場では慣行品種「夏扇パワー」を供試している。
- 2 斑点性病斑に対する防除価は、調査株ごとの発病指数から求めた発病度を元に算出しており、可販率は黄色斑紋症状の被害度を元に算出している。
- 3 葉先枯病斑・斑点性病斑は、葉枯病菌がネギ葉身に感染して生育することで形成される。葉枯病菌による黄色斑紋症状は、葉先枯病斑・斑点性病斑上でつくられた分生子がネギ葉身（上位4葉）に付着・感染した部分にネギが反応して形成され、黄色斑紋症状を呈した部分では葉枯病菌の生育が抑制されている。
- 4 葉先枯病斑に対する薬剤防除は困難であるため、葉先枯の発生を少なくするように適正な肥培管理を行う。
- 5 2年間の発生消長調査で葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）の発生初期は9月上旬であった。

[具体的なデータ等]

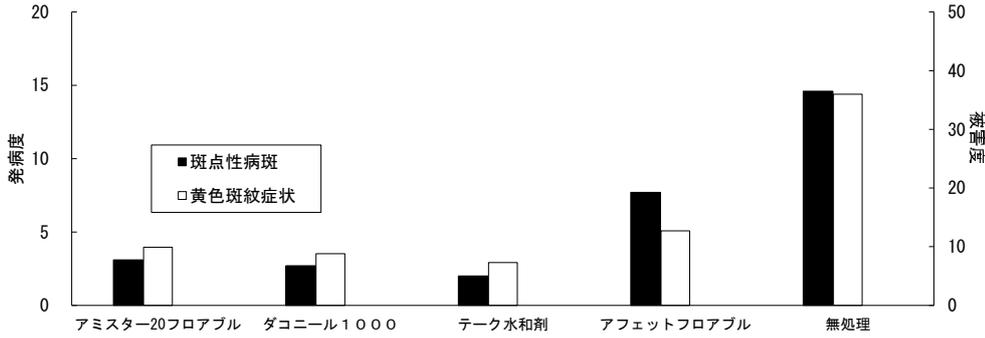


図1 葉枯病（斑点性病斑、黄色斑紋症状）に対する各種薬剤の防除効果（2016年）

注1) アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、アフエットフロアブルの希釈倍数はそれぞれ2,000倍、1,000倍、600倍、2,000倍である。

表1 各防除体系の概要（2016年、農業試験場内ほ場と能代市現地ほ場）

処理区 (散布回数)	月日					
	9月上旬	9月中旬	9月下旬	10月上旬	10月中旬	10月下旬
1(4)	9/7 (9/7)	9/15 (9/16)	9/26 (9/27)	10/5 (10/5)	10/17 (10/17)	10/28 (10/28)
2(3)	ダコ	テーク		アミ		
3(慣行)(2)		オンリー		アミ		
対照(6)	ジマン	テーク	ダコ	テーク	アミ	アフェ
無処理						

注1) アフェ：アフエットフロアブル、アミ：アミスター20フロアブル、オンリー：オンリーワンフロアブル、ジマン：ジマンダイセン水和剤、テーク：テーク水和剤

注2) 農薬は登録内容に準じて使用し、散布液量200L/10aとした。

注3) ()内の日付は能代市現地ほ場の薬剤散布日である。

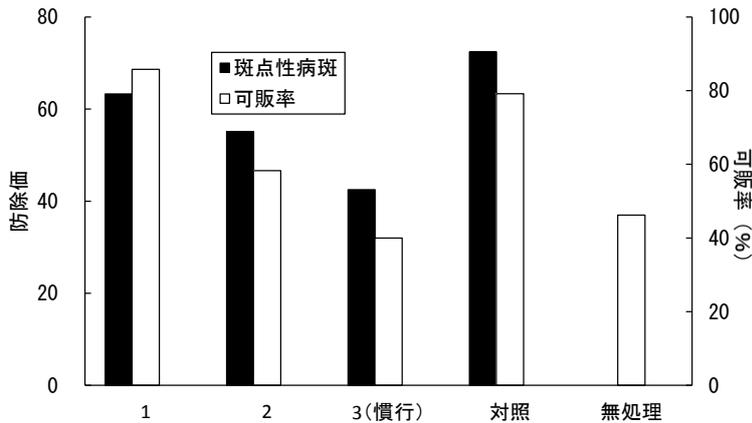


図2 各防除体系における葉枯病（斑点性病斑）に対する防除効果と可販率（2016年、農業試験場内ほ場）

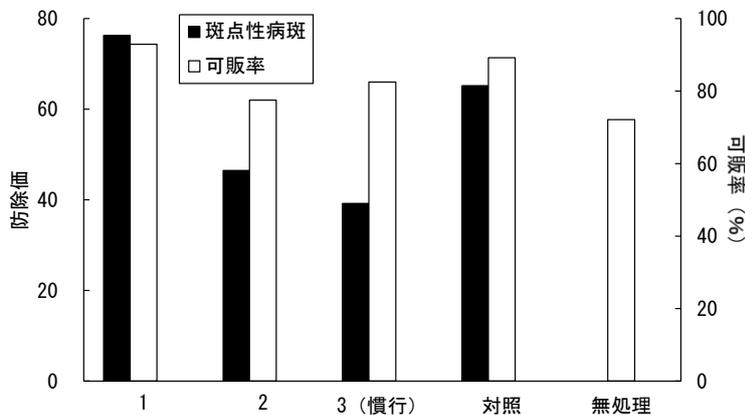


図3 各防除体系における葉枯病（斑点性病斑）に対する防除効果と可販率（2016年、能代市現地ほ場）

[発表論文等]

北日本病害虫研究会報に投稿予定